

川内川河川激甚災害特別緊急事業に伴う虎居城跡の発掘調査が、5月8日から鹿児島県立埋蔵文化財センターとさつま町教育委員会により進められています。先立って実施されていた伐採工事も6月末には終了し、樹木や竹に覆われていた虎居城跡の姿があらわになっています。



シオノ城跡から市街地を望む

■虎居の町並みを一望できる「シオノ城」と「ナカノ城」

「シオノ城」や「ナカノ城」と呼んでいる台地上がると、平坦地になっていて、その一角に土塁状の盛土がみられます。このような平坦地を曲輪まがらみといいます。曲輪に、土塁のほかにもどのような施設があったのかについては、さらに発掘調査を進めて明らかにしていきます。

川内川は「シオノ城」「ナカノ城」の北側を流れ、標高差約40メートルの険しい崖になっています。そして、ここから川内川の向こうに虎居の町並みを一望することができます。

■水を張ったが、湿地にして防衛性を高めていた虎居城

「シオノ城」「ナカノ城」のほか、宮之城高校跡地も「オキタノ城」と呼ばれる曲輪ですが、これら曲輪の間は、堀が作られて

て、防衛していたものと考えられます。しかしながら、現況を見ると比較的なだらかで、間隔も広く、あまり防衛の役割を果たしていないように思われます。

そこで、試掘をしたところ、室町時代の終わり頃の地面が2、3メートル下から見つかりました。しかも、谷を活かした険しい形状をしています。

堀部分を掘り進めると、堀と曲輪の境部分から水がたたくさん湧き出てきます。虎居城跡の地下には岩盤の地層があるため、地下水が湧き出てくるものと思われる。現況では空堀と思われませんが、水を張ったが、湿地にして防衛性を高めていた可能性があります。

■廃城になって、およそ四百年が経過

江戸時代の一六一五（元和元）年の「一国一城令」により、虎居城は廃城となり、宮之城島津

氏の家臣団がこの地に住んだと文献に記録されていますが、城の防衛性を残したままでは、反乱の疑いがかけられたのでしょつか、大規模に堀を埋め立てたのではないかと想定されます。虎居城は、廃城になっておよそ四百年が経過します。廃城に伴う城の改変とその後の災害や畑地に利用されたりなどして戦国当時の景観は大きく変わっています。

今後さらに発掘調査を進め、その姿を明らかにし、より確実に記録に残していきたいと思えます。

寄稿

鹿児島県立埋蔵文化財センター
（虎居城跡発掘調査担当）

文化財主事 中村 和美

埋蔵文化財発掘調査に関する
問い合わせ

町教育委員会文化課

☎ 1732

ふるさと歴史探訪



このコーナーは、ふるさとの歴史や文化財などを紹介します。
※2ヶ月に1度の掲載となります。

シリーズ②

文化財の標柱

町内には、いたる所に白いペンキが塗られた四角い柱の標柱があります。この標柱は、「ここに文化財がありますよ」との目印です。

柱に書いてある文字が『鹿児島県指定文化財』と書いてあれば、鹿児島県で貴重な大切なものと、認められた文化財です。『さつま町指定文化財』と書いてあれば、さつま町で貴重な大切なものと、認められた文化財です。その他にも多くの文化財の標柱がありますが、これもここに文化財がある目印となっています。

よく、柱には、さつま町教育委員会と書いてありますが、さつま町教育委員会が、その文化財の管理をしているのではなく、標柱を作成して建てたのが、さつま町教育委員会ということになっています。

文化財の標柱には、いろいろな意味があります。今度、見かけたら、ゆっくりと見てください。文化財の標柱巡りをしていても楽しいかも……。



虎居の庚申塔（県指定）



鶴田大角の庚申塔への入口（県指定）



永野別府原古墳（県指定）